紫雲山極楽院光勝寺は四条坊門堀川の東敵町にあり、空也堂と号す。〔表門の額空也堂と書して黄檗高泉和尚の筆なり、本堂の額極楽院は竹内御門跡の筆跡なり〕宗旨は念仏宗と称して、本堂には空也上人自作の像を本尊とす、脇士は地蔵毘沙門天なり、北の脇壇には坐像の阿弥陀仏を安置す、是行基の作なり。又空也上人の像あり。〔定盛法師香炉の灰を以て作る〕南の壇上には定盛法師の像を安ず。抑空也上人は延喜帝第二の皇子なりしが、塵外の無為を楽の志願ましく〳〵ければ、遂に出家し給ひ、玉楼金殿を立いで、北山鞍馬の奥に蕭然として山居し給ふ。麋鹿夜々来つて閑坐を慰ける、上人是を憐み其声を愛し給ふ事深し、一日鹿来らず、然に平定盛といふもの遊獵して鹿を持来り、此山において討取し由をいふ。上人大に愁傷し、其鹿を得て皮を裘とし、角を杖の頭に挾て常に携給ふ。獵者定盛も上人の法徳に帰入し御弟子と成、教化に任せ、妻子を具し、頭は有髪の俗体にして衣を着し。〔衣は天台衣なり〕瓢を叩て上人御作の和讃を諷ふて、寒中には夜々五三昧、市中などを徘徊し、浄土往生の因を勧るなり。〔今空也堂の境内に八軒あり、鉢叩と称す。徳正庵、金光庵、寿松庵、東坊、正徳庵、利清庵、南坊、西巌庵等なり。皆定盛法師苗裔なり、常に茶筌を製して業とす〕

上人定盛法師に示し給へる歌

山川の末に流るゝとちからも身を捨てこそ浮む瀬もあれ　　空也上人

千載　極楽ははるけき程と聞しかどつとめて至る所なりけり　　同

空也上人出誕は延喜三年なり。〔月日不詳〕入寂は天禄三年九月十一日、奥州会津黒川郷八葉寺にて往生を遂給ふ、年七十歳。〔京師より関東へ趣給ふは十一月十三日なり、此日毎歳当寺において歓喜踊躍の念仏を修す〕当寺の什宝五品あり、片破鰐口〔上人加茂社へ参籠の時、明神出現ましゝ、末世衆生念仏往生の証拠にとて、宝殿の鰐口を二つに引放し、左の方を上人に与へ、右の方を加茂の神殿に止給ふ〕衣替鰐口〔松尾明神老翁と現じ、上人に謁して曰、此頃の神供に般若経の法味をうけて、いまだ妙法の醍醐味を食せず、此ゆへに痩衰て風はだへを通す、上人は法花経をよく読誦せり、われに心あれや。空也これを聞て衣をぬぎて、われ此衣を着して法花経をよむ事既に四十年、其妙香の薫り此衣にそまる、これを奉らんといへり。翁悦て衣を着し、かたちはさもあたゝかに見へける。又一つの鰐口を出して上人にあたへ、西をさして去給ふ。此衣は鹿の裘なり今松尾の社にありといふ〕鹿角杖〔由来まへに見へたり〕絵詞伝〔空也上人の伝記なり、青蓮院御門跡尊証法親王の筆なり、奥は公卿の寄合書、絵は海北友雪の筆〕御袈裟〔東福門院の御寄付なり〕